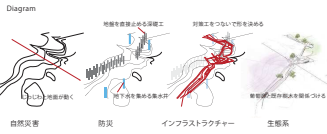


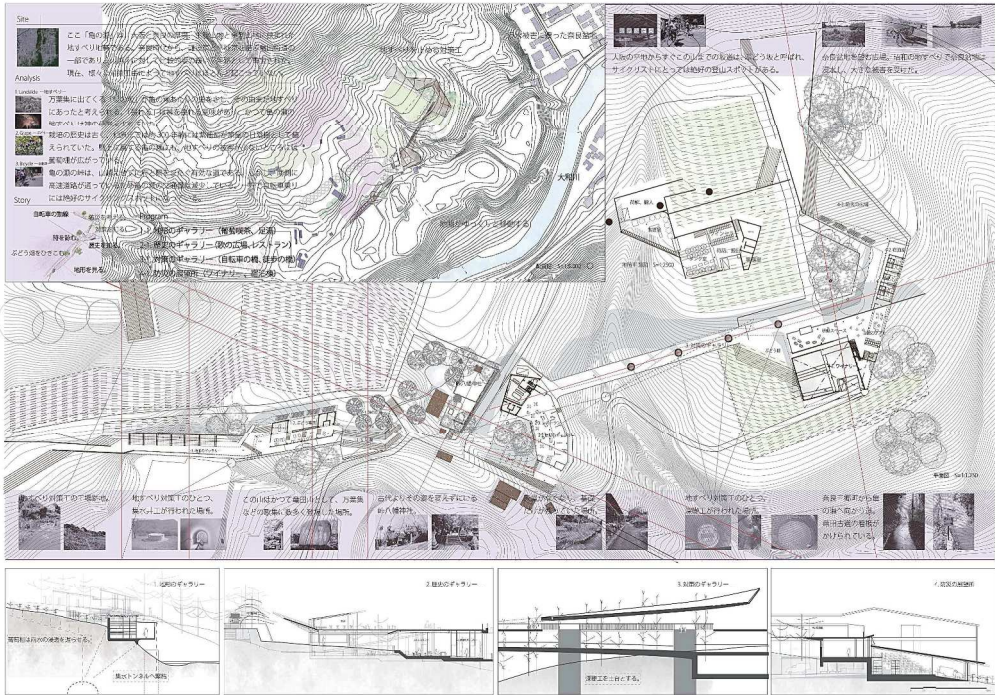
「畏の坂」に来る

大阪と奈良の県境にある、かつての地滑りで「畏の坂」と呼ばれた地すべり地帯の一角に、葡萄畑や自転車専用ロードを記することによって、日常においては人々が憩い集う場所である一方、非常時の災害に対する啓蒙作用をも合わせもつ公共空間を考える。

大阪と奈良の県境にある、かつての地滑りで「畏の坂」と呼ばれた地すべり地帯の一角に、葡萄畑や自転車専用ロードを記することによって、日常においては人々が憩い集う場所である一方、非常時の災害に対する啓蒙作用をも合わせもつ公共空間を考える。



「設計概要」かつて「畏（かしこ）の坂」と呼ばれた亀の瀬の地すべり地帯に、葡萄と自転車を主役とした遊の駅を設計する。近年、山原や軟弱地盤における乱開発により、土砂災害や浸水被害、環境汚染が相次いで起こっている。被害人口の増加には、地震や台風が多いことや、山地の割合が多いことはもちろん関係しているが、身近な原因の一つに、人々の自然災害に対する知識の少なさ、危機感の薄さが挙げられる。自分の家、かどのような地盤の上に乗っているのかを想像できる人は少ない。この計画では主に4つのシーンを通して、人々の自然災害に対する知識や意識を高め、自分や自分の周りの人々だけでも防災減災ができるように、その意識を緩やかに浸透させる空間を提案する。地形を観察し、歴史を学び、対策工を体感し、被害を想像し、人は知識を身につけ防災を意識する。この建築は、家族連れ、通勤途中の人、奈良のお寺に行く人達が気軽に立ち寄る遊の駅、ゆったりと防災意識が実る場所。制作のテーマについて 昨年、豪雪や集中豪雨、火山噴火などの自然災害が相次いで起こり、多くの死傷者が発生した。これからの自然災害による被害を少しでも減らしたいと思い、土砂災害を中心に調べていたときに見つけた場所が、大阪の「亀の瀬」であり、ただ単に出発が大阪というだけで、親近感が湧いたことから始まったのがこのプロジェクトである。自然災害はありふれているけれど、被害に遭ったことがない人々が自然災害を身近に感じられる場所は意外に少ない。地すべりや葡萄と自転車という庶民的なものを関係づけ、少しでも身近に自然災害を感じられる空間、自然に防災意識が実る場所となるように考え、設計を進めた。



(1) 研究旅行のテーマ - 自然災害によって変化してきた地形と街並の関係 -

1. 卒業研究で改めて考えた日本の特徴

日本は山と平地の割合や、プレートの境界という位置、温帯や寒帯に属するなどの関係から、気候の違いや四季の変化、川や山、海など様々な自然の要素と生活を共にしてきた。それによって、日常において、いつでも自然災害を受ける可能性が一人一人にあるということであり、また一方で、自然的要素を生かした特長的な建築が生まれる可能性も持つということでもある。しかし「歴史の深さ」でも述べられているように、国と地が異なる日本は、内外の文化や習慣を大切に、新しい考えを取り入れる態度が育まれてきた。もちろん、都市計画の発展ではその歴史の深さや誇りを感じ、習俗を大切にしている場所もあるが、このままだと経済成長の波が押し寄せてくれば、そういった風土と人の関係が稀薄になっていってしまう。街並の美しさや人の気配を高くする日本の未来は想像できない。私が卒業設計で計画地とした亀の瀬も、いづゆる部外でも想定外に増え続けている。一方で地すべりの対策工事を続け、新たな関係が予定されているが、歴史や土地のポテンシャルを最大限に活かすことは考えにくい(裏では最終処分場の問題も抱えている)。近隣には乱開発が多数見受けられる。日本の街並を良いものにしていくには、こういった例を一つでも良い方向に転換させ、根拠よく長期スパンで問題に向かい合い、質の良い建築を築き、改修し、設計していく必要があると考える。



2. 自然災害(地すべり)によって形成された地形と街並の関係

「街並の美学」に登場する多くの街並に関係していることとして、微地形と建築の関係が挙げられます。人工的な城壁、山の斜面などさまざまな地形の要素と、それら地形の影響を受けた建築の意、曲りやわがた意匠の美しさも関係性は街並を築き、魅力的なものを感じさせます。そのなかでも、今回は自然災害の一つである地すべりを中心として、その特殊な地形と、それに伴う街並の歴史や微妙な変化を見つけ出し、なぜこの形は生まれたのか、地形と建築と人の関係性、まで調査し、それがなぜ美しいか、もう少しこうしたいらいい、など自分の中の思考を巡らせ、設計を考える上での可能性を広げることが目的です。

3. 調査場所とその場所の特徴

ヨーロッパの地すべり地帯のひとつであるイギリス南西部を研究の対象とします。調査の方法として、イギリス特有のバリアックフォットパスを歩き、実際に微妙な地形を体感し、また、フットパスの特徴である公民館の存在に着目し、その境やあいまいな分かれ目を意識しながら調査を行います。

フットパスとは、ウォーキングのための小道が主に張り巡らされている。フットパスの起源は古く、ウォーキングが娯楽となった時代にはそのほろと書かれ、森林や山にはもちろん、牧場やゴルフ場にもフットパスはある。また、私語地でもあったフットパスは現在にまで残っており、最も多く歩かれるとされている。

(2) 訪問予定の外国の都市・街並・建築物の内容



バース(Bath)はロンドンから約176km西、ブリストルから19km南に位置する。この温泉地帯はロンドンから約176km西、ブリストルから19km南に位置する。この温泉地帯はロンドンから約176km西、ブリストルから19km南に位置する。この温泉地帯はロンドンから約176km西、ブリストルから19km南に位置する。

卒業設計のタイトルと概要

大阪と奈良の県境にある、かつての地滑りで「畏の坂」と呼ばれた地すべり地帯の一角に、葡萄畑や自転車専用ロードを記することによって、日常においては人々が憩い集う場所である一方、非常時の災害に対する啓蒙作用をも合わせもつ公共空間を考える。

研究旅行のテーマと訪問予定の国(都市)

テーマ：自然災害によって変化してきた地形と街並の関係
訪問予定の国：イギリス南西部
コッツウォルズの丘陵地帯からバースまでをパブリックフットパスを利用して縦走する。

参考 URL : http://powerlife.seesaa.net/